



企業献金禁止を行い国民の声が行き届く本来の民主主義へ

企業献金禁止の重要性について

自民党の企業献金問題は、企業が自民党に多額の献金を行うことで、政治家が企業の利益を優先する政策を推進する圧力を受ける可能性があるという問題です。「れにより、一般国民の利益が軽視される」とが懸念されています。2023年に自民党は、企業や団体から約22億円の献金を受け取つており、これは他の政党と比較しても非常に高額です。このような状況から、企業献金が公正性が損なわれるとの批判が出ています。

企業が特定政治家や政党に対し多額の献金を行うことで、その政治家や政党は選挙活動において有利な立場に立つことができず。お金のある政党はテレビなどでもCMを流すことができ、これにより選挙の公平性が損なわれ、民主主義の根幹が揺らぐ」という問題は、政治資金規正法の改正をめぐる議論の中で注目を集めています。

なります。

また、大企業が多額の献金を行つことで、その企業の利益が優先される政策が推進され、中小企業や一般国民の利益が軽視され、社会的な不平等が拡大する可能性があります。企業が政治家に対して多額の献金を行うことで、政治家はその企業に対して特別な便宜を図る行動を取ることがあります。

企業献金を禁止することでは、選挙の公平性を確保し、民主主義の健全な運営を維持することができます。企業献金に頼らず、市民からの支持を得るために努力することで、政治家は市民の意見や要望をより重視するようになります。

政治が市民のために機能して、民主主義の本来の姿を取り戻せます。

もう一つの問題は、政党助成金です。国民の税金から支払われるものであり、その使途が適切であるかどうかが問題視されています。

2023年には自民党が約8.

5億円の政党助成金を受け取つております。その一部が選挙活動や

政治活動に使われていることが報告されています。また、企業献金と政党助成金の一重取りが問題視されており、これが政治腐敗の温床となる可能性があると批判

されています。さらに、政党助成金の使途が不透明である」とから、国民の信頼を失う原因となつています。

特に、選挙活動に使われる資金がどのように使われているかが明確でないため、透明性の向上が求められています。

企業献金禁止、政党助成金の透明化、廃止など、政治の公正性を確保し、政治腐敗を防ぎ、選挙の公平性を維持し、社会的な不平等を是正するために重要な不平等を是正するために重要な

労働組合としても、企業献金禁止の実現に向けて積極的に取り組んでいきたいと思います。

街頭インタビュー

仙洞田一彦

いつも通り午後二時ごろ散

ても、体に自然、力が入る。一日家にいると、体の調子が良くない。夜の眠りが浅くなる感じがする。もつとも電気代、ガス代を気にしないで部屋を暖めて、薄着でいらさればそんなことはないかもしない。

今にも止まりそうな、ゆっくり歩く散歩でも三時間ほど歩けば、体がほぐれた感じがする。電気、ガスはその間止めておくから、電気代、ガス代の節約にもなる。

のだが、今日はあいにく、曇り空だ。強風ではないが風もある。マフラーをし、ダウンコートのファスナーも上げて、風が入らないようにした。下着も十日ほど前から、長そで、股引にした。

高級住宅街を通りすると、通行人全部が、私なんかより二、三枚薄着ではないかと見える。ダウンのコートなどを見ているのを見かけない。来ている布地が高級で、保温性が高いのではないかと思う。それよりなによりフトコロの温かさが違う。思わずひがみ視線で行き交う人を眺める。今日の散歩コースはない。

いつも通り清流沿いの道を歩く。清流があるわけがない。いい匂いのするかわづぶちを歩く。歳のせいで鼻の性能も

ある。マフラーをし、ダウンコートのファスナーも上げて、風が入らないようにした。下着も十日ほど前から、長そで、股引にした。

悪くなつた。それでも風向きか、何か知らないが、思わず川沿いの道から離れたくなる日もある。鼻だけでなく目も耳も衰えた。

昔は個人営業の商店がほとんどだつたが、今は飲食店でも服飾、小物でもチエーン店が軒を連ねてゐる。

散歩するときは文庫本の短篇集を持つて出る。喫茶店に入つてコーヒーを飲みながら、短篇を一つ読むのだ。その喫茶店も個人営業と思われる店は高い。コーヒードの値段が上がつてゐるから仕方ないだろう。本当はそういう店に入

りたいのだが、入らない。結局チエーン店だ。商店街を駅の方に向かいながら、よく寄る三軒ばかり覗いたがどこも

いつぱいだつた。
こういう日は、どこにも寄
らないで帰るか、書店で本棚
を眺めて時間をつぶし、また
その店を覗いてみるかだ。
ぶらぶらと歩き駅前広場に
出た。少し風景が違う。見慣
れない男たちがいた。四、五
人いただろうか。それぞれテ
レビカメラらしきものを持っ
ていた。動きやすそうなブル
ゾン姿で、中年で見るからに
活発そうだ。見ていたら高齢
の女性に声を掛けた。すぐそ
ばに交番もあるし、カメラを
持っているので年寄りを狙つ
た詐欺ではないだろう。パト
カーのように白黒の車だが、
区名が入っている宣伝カーで、
詐欺にかかるないように高齢
者に注意して回っている。そ
れが頭に刷り込まれてしまつ

ているせいか、若い人が高齢者に話し掛けている場面を見ると、すぐに詐欺を連想してしまう。

時間つぶしに駅ビルの書店にでも行こうかと思つて歩いたら、広場の中ほどで、カメラを持つているうちの一人に声を掛けられた。

「……の……」という番組ですが……お話を聞かせてください。……お時間、少しいいですか

補聴器をつけていなかつたので、正確には何と声を掛けられたか分からぬ。テレビ局の名前も、番組名も言つたようだが、なんと言つたか分からぬ。

以前、知らない人から声を掛けられて、まだ若かつた私は「話し掛けるなら、まず自

分の名前を名乗れ」などと言

つたこともあつた。今はそんな元氣もないが、相手は名乗つた。よく分からなかつたら聞き返してもいいのだが、

面倒くさかつた。何度も聞き返すと失礼になるようと思ひ、分かつたような返事をする。

分かつた言葉をつなぎ合わせて推測すると、インタビューしたいということだろう。

急いでどこへ行くという時ではなかつたので立ち止つた。

大柄な相手は胸のあたりにカメラを抱えて、こちらにレンズとマイクを向けた。私から見れば、相手は誰でもだいたい大柄だが、堂々としていた。

「お正月になりますが、どこ

か旅行にでも行く予定がありまますか……いろいろ物価が上がつて大変ですが……年金で

生活されているんですか」

駅前の騒音もあつて、細切れな質問のように聞こえるが、聞こえないところはやはり推測して答えなければならない。

補聴器をしていれば聞こえて、理路整然とした質問していたのかもしれない。聞こえた言葉をつなぎ合わせて、何を聞きたいんだろうかと考えた。

物価が上がり続け、苦しくなつてゐるだらうと思われる年金暮らしの人の実態を、街頭インタビューでつかみ、報道しようというのだらうと思つた。

テレビ局の人は、正月旅行もクリスマスもできると思つてゐるだらうか。クリスマスに家族集まつて、プレゼントを交換したりケーキを食べたり、あるいは出かけてちよつと豪華な食事をする。正月にはどこか温泉につかりに行くと思つてゐるのだらうか。

「旅行は考えていない。正月もここにいるよ」と答え、年金暮らしかの質問には「そうだ」と答えた。

「年金は、いくらぐらいですか」と年金受給額を聞いたが、

それには「答えたくない」と

言った。言いながら、なぜ答えたくないだらうと自問してみたが、すぐに答えが出なかつた。

「クリスマスは何かご予定は

私は首を横に振つた。逆に

私が質問した。

「どのくらいの収入を考えて言つてあるの」

テレビ局の人は、正月旅行もクリスマスもできると思つてゐるだらうか。クリスマスに家族集まつて、プレゼントを交換したりケーキを食べたり、あるいは出かけてちよ

つと豪華な食事をする。正月にはどこか温泉につかりに行くと思つてゐるのだらうか。孫たちにお年玉を上げる。

この辺を歩いている人たちは、そんなにたくさん年金を

もらつて いるのだろうか。そのためにはどのくらいの年金を貰つたらできると考えているのだろうかと思つたのだ。

さらには私は言つた。
「年金の枠内で生活しているから、できないとわかつて、いる旅行など、はじめから考えていいないよ。クリスマスだつてそつだよ」

と、言つた。すぐに別の考へが頭に浮かんだ。いや、違う。

この辺を歩いている人たちは貧しく、クリスマスも正月もないはずと見込んで、インタビューの場をここに選んだのだ。でも、それは黙つていた。

次の質問が出てこない。私も何を答えてよいのか分からなくなつた。

「じゃ、」
と言つて、片手を上げて、

駅ビルに入つて行つた。書店は上にある。エスカレーターで運ばれながら考へた。

は高齢者ばかりだつたようだらうな。インタビュー側はどんな回答を期待していたんだろうと考へた。

「物価が上がつて、何時もしていた正月旅行なんて、もう考えられない」

そう答へれば、もしかするとテレビに映つたかな、などと考へた。

「今まで、クリスマスに集まつて、みんなでどんちゃん騒ぎをしてたけど、場所代、酒代みんな値上げでできなく

なつた」

と答へればよかつたのかなあ。そうすれば私の顔が電波

に乗つかつて、全国に広がつていくのかな。

旅行もできない、クリスマスもできない。そんな生活が二十年近くも続いている。物価が上がれば、できないことがより遠くなつて、さらに手が届かなくなつただけだ。

いや待てよ……

そう考へて いるうちに書店のある階を過ぎてしまつた。

下りのエスカレーターに移りながら、閃いた。今日のインタビューは「苦しいでしよう」
「貧しいでしよう」と念を押されて いるようだが、私はあまりそれを感じていないので。下りのエスカレーターに足を乗せた。

一階に着いた。ちよこちよ本があふれ、カビも生え、こと急ぎ足で駅前広場に出て見たが、放送局の人達はすでにいなくなつていた。

とか、何も感じなくなつてしまふ。旅行に行くなどもつてていると、脳裏から「旅行」のほかと思つて長いこと暮らすのだ。旅行に行くという「欲」いう言葉がなくなつてしまふ。苦しいでしよう」ともなくなつてしまう。「物価が上がつて苦しいでしよう」というけど、苦しいのは当然と考へて いるから……つまり、抵抗する気力をなくしている。「欲」などとも縁が切れてい る。苦しいという声すら上げられない。つまり、貧困以前の苦しいといふのは、ちよつとか……つまりその、ちよつと いうか、それ以下ということが……つまりその、ちよつとそのあたりを補足説明しないといけない。

そういう部屋に長いこと暮らしていると、不潔だとか何だ